

## 右腎癌術後20年目に肺転移を来たした1例

兼子 美帆, 松本 成史, 田原 秀男  
石井 徳味, 植村 天受  
近畿大学医学部泌尿器科学教室

### PULMONARY METASTASIS OF RENAL CELL CARCINOMA 20 YEARS AFTER NEPHRECTOMY

Miho KANEKO, Seiji MATSUMOTO, Hideo TAHARA,  
Tokumi ISHII and Hirotsugu UEMURA

*The Department of Urology, Kinki University School of Medicine*

A 70-year-old man underwent right nephrectomy for clear cell renal carcinoma in 1985. After nephrectomy, he was routinely followed up as an outpatient. Solitary chest tumor was detected on pulmonary CT in 2005. A wedge resection of pulmonary tumor was performed under diagnosis of primary lung cancer. The histological feature was not of primary lung cancer, but the previous nephrectomised specimen, i.e., clear cell renal carcinoma.

(Hinyokika Kiyō 52 : 929-931, 2006)

**Key words :** Renal cell carcinoma, Pulmonary metastasis, Late-recurrence

#### 緒 言

腎癌は遠隔転移が多く、中でも肺への転移がもっとも多い。腎摘除後から肺転移出現までの期間は5年以上に多いと言われており、調べうる限りでは術後再発なく経過していたが20年以上してから肺転移を来した症例は4例であった<sup>1)</sup>。今回われわれは腎癌術後20年目の再発という稀な症例を経験したので報告する。

#### 症 例

患者：70歳，男性

主訴：特記すべき所見なし

既往歴：1985年，無症候性肉眼的血尿を主訴に他院受診となり腹部CTにて右腎癌を疑われたため手術目的にて当院紹介となった。入院時所見としては右腰部痛を軽度認めるもその他異常所見はなかった。画像所見では選択的腎動脈造影にて腎中～下極にhypervascularの腫瘍を認めたため (Fig. 1)，1985年2月13日に根治的右腎摘除術を試行した。病理組織検査ではrenal cell carcinoma, clear cell type, G1, INFγ, pT2N0M0であった。術後1カ月後よりインターフェロン (IFN) α (薬品名不明) 900万単位の週2回投与開始となり，約1年間投与された。退院後前医で約5年間経過観察を行っていたがその間再発は認めなかった。またその後も，毎年会社検診を，退職後は自治体検診を受けられていたが，胸部写真では異常陰影を指摘されなかった。

現病歴：2005年1月に健康診断で右胸部異常陰影を

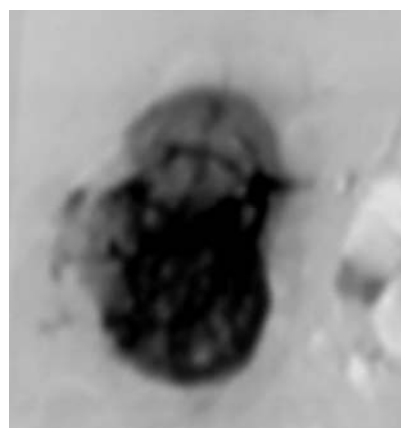


Fig. 1. Renal arteriography showed hypervascular mass in middle to lower lobe of kidney.

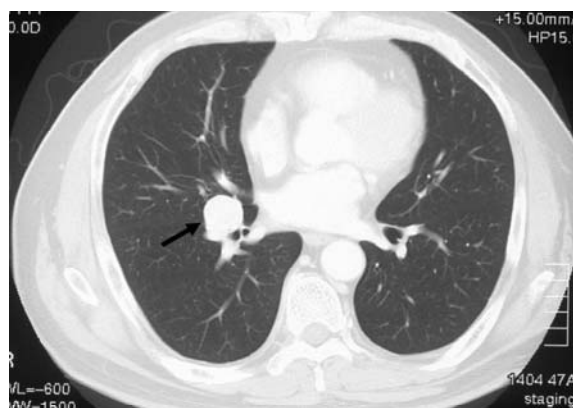
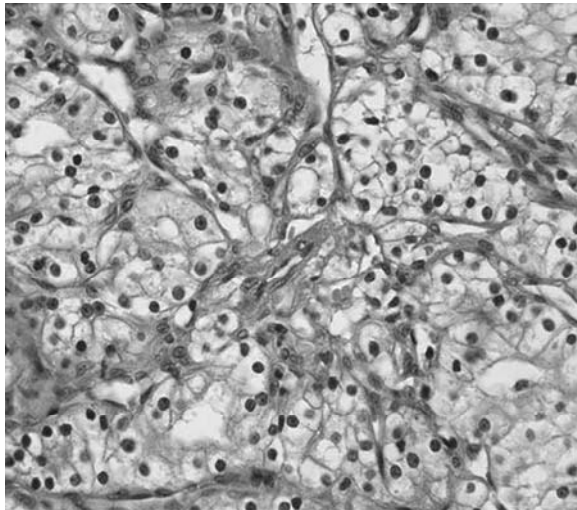
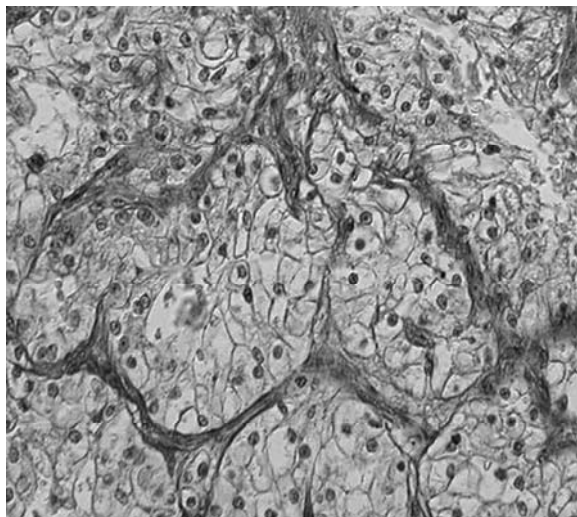


Fig. 2. Chest computed tomography, performed in 2005, revealing a small nodule in the right lung.



(a)



(b)

**Fig. 3.** (a) Histological finding of the clear cell type renal cell carcinoma 20 years ago (HE  $\times$  400). (b) Resected lung tumor diagnosed as compatible with metastatic renal cell carcinoma to the lung (HE  $\times$  400).

指摘され (Fig. 2), 肺癌疑いにて他院で右肺中下葉切除施行された。肺の病理組織検査で腎癌肺転移と診断されたため追加治療目的にて当院入院となった。

病理組織学的所見：20年前の右腎癌および肺腫瘍の病理組織を比較すると、両者共に clear cell type であった。これにより、腎細胞癌の肺転移であると診断された (Fig. 3)。

入院時検査所見：血算、生化学検査、検尿にて異常を認めなかった。

入院後経過：入院時より IFN (イントロン A<sup>TM</sup>) 600万単位の週3回投与開始となった。微熱を認めるのみでその他明らかな副作用は認めておらず、退院後引き続き外来での経過観察となった。

## 考 察

根治的腎摘除術後の再発部位は肺転移が最も多く、原発巣手術後5年以内に多いと言われている。今回調べうる限りでは腎摘後再発なく経過していたが、術後20年以上経ってから肺転移を来した症例は4例報告があった<sup>1-5)</sup>。肺転移においては IFN の奏効率は高いと言われているが、肺転移単発例に関しては外科的切除例の方が優位に生存期間の延長が見られると報告されている<sup>1)</sup>。

現時点まで調べうる当院の腎癌症例504例中腎摘除術後、肺転移出現までの期間が10年以上経過した症例は本症例を含めて2例あった(2例とも肺転移が1回目の再発であった)。肺転移は5年以内に多いと言われているが、本症例を含め10年以上経過してからの肺転移症例もあることから長期間に及ぶ経過観察の必要性を痛感した。転移の危険因子として確立されたものは pT 分類があり、Mickish ら<sup>6)</sup>のプロトコルでは pT1~2 の症例に対しては経過観察期間を5年間、pT3~4 の症例に対しては10年間としている。また、Levy ら<sup>7)</sup>の報告では、pT1~3 の症例で5年間の経過観察を必要とし各分類に応じて画像検査の頻度を多くすることを強調している。また、Hefez ら<sup>8)</sup>の報告では pT2~3 の症例に対して6年間の経過観察をするなど、各施設によって様々なプロトコルがある。また国内では、村本ら<sup>9)</sup>は腎癌根治術後の再発は265例中17%は35.2カ月で認められ、術後3年以内で60%、6年以内で87%であり、病理病期別再発率、根治術後再発期間はそれぞれ pT1 9.0% : 43.6カ月、pT2 32.4% : 39.6カ月、pT3 37.2% : 25.0カ月であったと報告している。また肺転移は術後3年で57%、6年間で76%が発見されており、pT1・pT2 症例に肺転移が多い傾向を認め、上記より各病期における肺転移と再発までの期間を考慮したプロトコルを作成している。遅発性再発症例の一般的予後については、里見らは遅発性の転移が出現すると、その発育速度が早いものが多いと報告している<sup>10)</sup>。われわれが調べた限り、原発巣摘除後早期再発例と遅発性再発例の予後についての論文は見出せなかった。今後、早期と遅発性再発例の予後に関する大規模調査による最新のエビデンスが望まれる。

本症例のように根治的腎摘除術後再発なく経過していたが20年目に肺転移を来した症例を経験したことから、腎癌の術後は最低10年間の経過観察を必要とし、それ以降も患者に健康診断などでの定期検査を促すことが大切と思われた。

## 結 語

右腎癌術後20年目に肺転移を来した稀な症例を経

験した。肺転移出現まで20年以上経過した症例は検索した限りでは本症例は5例目であった。

### 文 献

- 1) Shiono S, Yoshida J, Nisimura M, et al.: Late pulmonary metastasis of renal carcinoma resected 25 years after nephrectomy. *Jpn J Clin Oncol* **34**: 46-49, 2004
- 2) Jett JR, Holliger CG, Zinsmeister AR, et al.: Pulmonary resection of metastatic renal cell carcinoma. *Chest* **84**: 442-445, 1983
- 3) Donaldson JC, Sleese RB, Dufour DR, et al.: Metastatic renal cell carcinoma 24 years after nephrectomy. *JAMA* **236**: 950-951, 1976
- 4) Bradham RR, Wannamaker CC and Pratt-Thomas HR: Renal cell carcinoma metastases 25 years after nephrectomy. *JAMA* **223**: 921-922, 1973
- 5) 良河光一, 森本真人: 腎摘除術後28年目に肺・縦隔に転移, 再発を来たした腎癌転移性肺腫瘍の1手術例. *日呼外会誌* **12**: 792-795, 1998
- 6) Mickisch G, Carballido J, Hellsten S, et al.: Guidelines on renal cell cancer. *Eur Urol* **40**: 252-255, 2001
- 7) Lavy DA, Slaton JW, Swanson DA, et al.: Stage specific guidelines for surveillance after radical nephrectomy for local renal cell carcinoma. *J Urol* **159**: 1163-1167, 1998
- 8) Hafez KS, Novick AC and Campbell SC: Patterns of tumor recurrence and guideline for followup after nephron sparing surgery for sporadic renal cell carcinoma. *J Urol* **157**: 2067-2070, 1997
- 9) 村本将俊, 岩村正嗣: 術後再発様式からみた腎細胞癌の至適経過観察プロトコール作成の試み. *日泌尿会誌* **91**: 700-707, 2000
- 10) 里見佳昭, 仙賀 裕: 腎癌患者の10年生存率および10年以上生存の検討. *日泌尿会誌* **75**: 118-125, 1984

(Received on April 4, 2006)  
(Accepted on August 1, 2006)